昭和52年５月25日　第３種郵便物認可　令和３年４月10日発行（毎月１回10日発行）

円福

世界の円満
人類の福祉

THE ENPUKU

4月

2021　No.487

世界法民連帯　円福友の会

円福友の会入会のすすめ

1食1円のＳＡＢＡ運動で世界の平和に尽くしましょう。

ＳＡＢＡとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの１食１円のＳＡＢＡとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築（教育）や、井戸やトイレの設置（環境衛生向上）を支援する、国際ボランティア資金の運動です。１食１円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やＳＡＢＡ運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもいやり』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

表紙の写真

2014 年のカンボジア支援旅行の折に、一人でクロントイスラムを訪問しました。
その時の写真です。スラムは、人口密集地帯。
細い道の両側にバラックのような家がぎっしりと所狭しと立ち並んでいます。
その家々に電気を送る配電盤がこれも密集した電線とともに柱に着いていました。
漏電しなければ良いなあと心配になりました。

4月号の内容

にこにこ法話　雑巾	１ｐ
教育里親－スラムの天使の歩みと闘い（その２）	３ｐ
途上国開発協力こぼれ話　⑩砂漠の国ヨルダンの話	５ｐ
教育随想　心の養育－愛育園物語（み仏に守られて）	10ｐ
大心　圓福	14ｐ

三月は卒業式、卒園式の季節です。お別れです。式では巣立つ子どもたちにお別れと励ましのメッセージを贈ります。それが式辞です。

学校に勤めている時は式辞を書きました。はじめての式辞は和紙に毛筆で書きました。清書に真夜中まで時間がかかりました。これは大変と、次からはパソコンで作ったものを大きなフォントの毛筆体でＡ４の用紙に縦字で印刷し、それを横長に貼り合わせ、蛇腹折りにしてあたかも毛筆で書いたように見せていました。こうして、書く時間を節約しました。だって、誰も式辞を見ませんからね。

雑巾

幼稚園や愛育園の子どもたちには、書かずに語り掛けるようにしています。今年の円福幼稚園の卒園式では子どもたちに「雑巾」のお話をしました。

昔、鍵山秀三郎先生からお聴きしたお話です。

皆さんは御卒園ですね。父が作った園歌にあるように「みんなのために綺麗な花を咲かせ、みんなのためにつくせる人になってください。いいですか。

「はーい」子どもたちは元気に応えます。

でもね、これはなかなか難しいんですよ。

あるお家に皆さんのようにとっても良い子が育っていました。

ニコニコ法話

お誕生日にはお祝いをします。皆さんもお誕生日にお祝いをしてもらえるでしょう。そしてプレゼントをもらうでしょう。

その子もお父さんとお母さんから、大きな箱に入った、綺麗な紙にリボンでくるんだプレゼントをもらいました。とってもきれいです。持ってみるとなんだか軽いです。

さあ、何が入っていたでしょう。

子どもたちはにこにこして聞いています。

その子が嬉しそうにリボンを紐解いて、綺麗な包装紙をあけてみると、中に雑巾が入っていました。

「えーっ！」子どもたちはがっかりしたように小さな声をあげました。

お父さんもお母さんも、その子が雑巾で周りを拭いて綺麗にするような子に育ってほしいという願いを込めてプレゼントしたのですよ。

皆さんは、綺麗なところは好きですか。嬉しいですか。

嬉しいですね。みんなのためにきれいな花を咲かせ、みんなのために尽くすとは、みんなをよろこばせることです。周りを綺麗にすると、心もきれいになるでしょう。そうすると、みんな喜びますよ。きれいな花が咲きますよ。

皆さんは小学校、中学校、高校、大学と進んでも、雑巾で周囲を綺麗にできる人になって下さいね。

教育里親

「スラムの天使」の歩みと闘い（その二）

私は自分の身にいったい何が起こったのかすぐには分からず、自分の自由の身が奪われて逮捕されてしまうかもしれないと不安に襲われました。悲しみと痛みで心が張り裂けそうでした。なぜ貧しい人々は地位が低く何の価値もないとみなされるのか、なぜ政府の役人の目には貧しい人々も同じ人間として映らないのだろうかと、心の中で叫ぶ自分の声が聞こえました。『一日一バーツ学校』は壊されて閉校になるのか、それとも存続のために闘うのか。私たちの選択肢はどちらか一つでした。

「子どもたちの大切な学校をつぶさせてなるものか！」貧しいスラムの人たちはその日暮らしだけで精いっぱいで大変でしたが、やがて存続運動が始まりました。

「どうして私たちは立ち上がって闘わないのか！」別のある日、住民たちの強制立ち退きに反対する集会で、もう一つの大きな声が上がりました。

「私たちは何を怖れているのだろうか。私たちには何も失うものはないではないか。なぜなら、私たちは長い間、野良犬と同じように蹴られたり、追い払われたりの人生だから」とピット伯父さんが声を発しました。彼は床屋さんで、クロントイ市場の突き当りにアヨタヤ倉庫が建設されることになり、立ち退きを命じられたのです。ピット伯父さんの言葉は、集会に来ていた住民たちみんなの魂を強く揺さぶりました。私たちの脳裏に焼き付いている貧しい人たちの姿は、権力のある人には控えめに振る舞い、自分たちへの不当な扱

いに対しても意見を申し立ててはならないという長い間捉われていた先入観から解き放ってくれたのです。

私には過去の辛くて苦い経験を振り返る時、自身の意識の中にはっきりと蘇る、ある光景があります。そこには一一歳から一二、三歳の子どもたちがいました。その子どもの中には私も含まれています。家計を助けるために何十人もの子どもたちが荷物の積み降ろしをする貨物船がクロントイ港へ入港している間に、金づちを持って船底等に入って錆を鑿（のみ）で叩き落とす仕事をしていました。貨物船が入港すると、私たちは昼も夜も働かなくてはなりませんでした。日当は、一日十二バーツ（一バーツは当時の十円相当・・・今は四円です。）、もし夜中まで働き続けると三十六バーツもらえました。

そしてある晩、そのすざまじい出来事が起こりました。子どもたちが船内の高い部分の錆び落としをするために昇っていた木とロープで作られた高い粗末な足場が崩れ落ち、一人の女の子が足場もろとも落下したのです。女の子の頭は床の鉄骨に激しくぶつかり、まるで魚が頭を叩かれた時のように血が飛び散り、身体がぴくぴくと痙攣（けいれん）していました。その友達は、その後身体障害者となりました。何の保障もなく、その時この出来事を申し立てる者は一人もいませんでした。もし申し立てたら、二度と雇ってもらえず仕事のチャンスがなくなるからです。

私もこれまでずっと恐れて来たけれど、もしこのまま恐れ続けていたら誰がこうした問題に強く立ち向かっていくのかと自分に問いかけました。この思いが源になり、貧しい子どもたちの教育と貧しい人々の生活向上につくそうと心に決めました。

（続く）

途上国開発協力こぼれ話
⑩砂漠の国ヨルダンの話

円福友の会顧問　吉田恒昭

今回は砂漠の国でのお話です。ヨルダン（Ｊｏｒｄａｎ）という国は日本ではあまり知られていませんが、オリンピックなどの国際競技の入場行進では日本（Ｊａｐａｎ）の次に行進してきますので国名を知っておられる方も多いでしょう。中東のイスラエルの隣にあり、海抜マイナス４００メートルの湖（死海）があることで知られています。塩分濃度が27％で比重が1・33もありますので生物が生息できない故に死海です。出張中に死海を訪れて試しに泳いでみましたが足が水面上に出てしまってとても泳ぎにくい体験をしました。周囲の川からわずかの淡水が流れ込みますが、湖面からの蒸発で水位は最近では低下が始まっています。ヨルダンは二千年前にキリストが布教をしていた地域に含まれており信者にとっては巡礼地でもあります。イギリスが中東地域を植民地にしていた時代には中東統治の中枢で、アラビアのロレンスの映画で登場するワディア・ラブ砂漠渓谷や紅海に面した港のアカバ近くにはローマ時代の世界遺産のペトラ遺跡があり観光が盛んです。

１９７３年のイスラエルとヨルダンを含むアラブ諸国との中東紛争に起因した第一次石油ショックでは年配の方のご記憶にあるように、日本社会も大混乱でした。トイレット・ペーパーと洗剤が市場から完全に消え失せてしまい、我が家でもほとほと困って神戸の親戚からトイレット・ペーパーを国鉄荷物で送ってもらう有様でした。この大騒動を経て、日本人の生活は石油が途絶えては立ち行

ヨルダンのパレスチナ難民テント、
子供が地雷被災で松葉杖（1978年）

かなくなることを体験しました。当時の日本のエネルギーは現在以上に大きく石油に依存しており、その石油は中東諸国からの輸入が１００％でした。従ってイスラエルとアラブ諸国の紛争が直接日本と関わり合っていることに気づかされたのです。

ちなみに現在でも、日本で消費される総エネルギーの国内自給率は10％程度です。加えて日本の食料自給率（カロリーベース）も先進諸国の中で最も低く40％ぐらいですので、日本は生存に不可欠な食料とエネルギーに関しては先進諸国の中で最も自給率が低く脆弱なのです。世界が平和でないと日本は生き残れない国になっています。日本はこの１９７３年の石油ショックを契機にアラブ諸国との友好親善に努め、彼らの国造りへの援助が大きく増えていきます。その一環として、私は１９７８年に当時アラブ諸国の中でリーダー的な存在で、パレスチナ難民が多数流入していたヨルダンへの支援に向かいました。具体的にはヨルダン北部のシリア国境に近い地域の開発調査計画造りで、現地滞在を2か月ほど経験しました。その時のお話です。

私が現地滞在したのは、１９７８年の盛夏7月頃で、砂漠の国の暑さに驚きました。日中は50度近くなりますので、首都のアンマン

でも街路を歩く人はまばらです。ほとんどの住民は昼食後に午睡をとります。私は急ぎの用件があって、丘の上にある日本大使館を訪ねることになりました。私の滞在するホテルは大使館へは徒歩圏内で20分ぐらいです。一歩ホテルを出て、大使館へ向かって街路を歩き始めますとほんの数分で汗が吹き出してきます。とにかく街路沿いの建屋の日陰を頼りにジグザクで歩く有様です。出てくる汗は空気が乾燥していますのであっという間に蒸発して塩気が浮き出てヒリヒリ感さえあります。息をすると喉に熱気を感じて渇きも尋常ではありません。何とも強力な太陽光線に敵意を感じ怒りさえ覚え始めました。やっとの思いで丘の上に建てられている日本大使館が見える所までたどり着きました。

登り坂の上の大使館には日の丸の旗が雲一つない紺碧の空に掲げられています。そう言えば小学校の音楽の時間に「白地に赤く　日の丸染めて　ああ美しい　日本の旗は」を口ずさみましたが、額の汗を拭きながら・・・思わず、ふと考えました。「砂漠の民にとって、太陽は灼熱地獄をもたらす無慈悲な悪魔の化身に見えるのではないのだろうか？」と。そう言えば、地球上で暑くて砂漠の多い国々の国旗を見ると星や月を描いたものがほとんどであることに気が付きます。砂漠の民は太陽を国旗として崇拝する日本民族をどう思うのだろうか？国の風土は国民生活と基底文化に決定的な影響を与えます。「日本人にとって砂漠の民を理解することが容易ではないように、彼らも太陽を崇める日本を理解するのは簡単ではないはずだ」と得心できた瞬間でした。多様な風土に根差した多様な価値観や行動規範を理解し合うことの難しさを大使館に翻る日章旗を見て感じたことでした。

現地調査は首都アンマンから60キロほど北でシリア国境近くの町イルビットに滞在しながらの地域開発計画造りです。ヨルダン川の水量や道路状況などを踏査するとともに、遊牧民の定住化も計画の一環で、砂漠の遊牧民として名高いベドウィンの一族の食事会に招待されました。大きなテントの真ん中に直径1メートルぐらいの真鍮の大皿を囲むように絨毯の上に胡坐をかいて座ります。大皿には炊かれたサフラン米が山のように盛られ、その天辺に羊の頭が丸ごと乗せられており周囲にマトンが散りばめられています。脳天部分が丸く削がれて、その中に脳味噌が浮き出て、開かれた両眼がうつろに上を睨んでいるのです。招かれた客人から大皿に手を付けます。先ずは脳味噌の部分をスプーンで削って頂くのが礼儀なので、調査団人は皆こぞって尻込みをしてしまいましたが、私は異文化交流の極意信条として「供応には信義を旨として頂く」と、意を決して脳味噌を掬って一口食べました。豆腐の如くで難なく呑み込めました。この体験を経て私はホテルのレストランでメニューに書かれているブレイン・マサラ（羊の脳味噌カレー）を注文したものです。

世界中で食べ物（郷土料理）ほど偏見に満ちたものはありません。大げさに言えば、地球上の気候風土の多様性に応じた郷土食味覚の多様性が地球資源の枯渇を救いバランスを保っていると考えるべきなのだと思います。味覚嗜好は三歳までに口にした食べ物でほぼ決定されるそうですので味覚の嗜好こそ不可侵で認め合うべきなのでしょう。世界中が欧米を真似て洋食になるのは、世界の食料資源の多様化尊重の立場からも甚だ好ましからざることなのです。砂漠の民にとってはウニやホヤは死んでも口にしないでしょう。

ベドウィンには国境はありません。自由に砂漠を移動できます。私たちもシリア国境付近まで踏査に出かけました。日中の酷暑では車の冷房は無力です。かといって走行中に窓を開けると熱風が車内に吹き込みドライヤーの吹き出し口にいるようで耐えられませんので、窓を閉めた車内はサウナ風呂と化します。このような灼熱の日中を終えて夕闇が迫り月と星が輝く時こそが砂漠の民にとっては安息の得難き時間の到来なのです。この夕闇が迫る時刻になると郊外のあちらこちらから毎晩必ず奇妙な叫び声（ヒギャー）がホテルの部屋にまで届きます。その声は何とも悲哀に満ちていて、この世を恨む声に聞こえます。あたかも来世こそは人間に生まれ変わるのだと仲間同士が声をかけ合っているようなのです。この叫び声の主は何とロバ達だったのです。昼間の灼熱の中でロバたちが無言で耐えながら背中に大きな荷物を積まされて背骨の皮膚から血を流しながら苦役に耐えている姿を・・・私は何度も見ました。それゆえに、夕闇が迫ると安息に身をゆだねつつも、己が不運に向かって泣き叫んでいるのだと・・・。誠に可哀そうなのはいつも周囲からドンキー（バカ）と蔑まされているロバたちなのです。

この体験があってから、私はロバに出会うと、日本ではありえませんが・・・、必ず頭を撫でて来世の幸運を祈ることにしています。

無言で耐えるロバ達
（この写真はエジプトナイル川付近にて）

教育随想

心の教育

心の養育

愛育園物語（み仏に守られて）

父は昭和六十三年に（株）ぱんたかから、「愛育園物語　おっしゃん」を刊行しました。昭和六十三年は愛育園創立四十周年です。

実は、私は「おっしゃん」は読んでいません。

園長としての父が見た愛育園と、子どもと一緒に育った私から見た愛育園が違っていることを、肌で感じていたからです。きれいごとではありません。だから読むのが嫌でした。

出版後二十年が過ぎた、創立六十年の年に私は理事長となって円福寺愛育園を継ぎました。父は九七歳でした。継ぐとすぐに、円福寺愛育園が潰れるほどの大混乱が発生しました。

故柳澤勲県議会議長の後を継いで戦没者慰霊太平観音堂の執事となられた、故栗田正治理事さんが、その時に、円福寺愛育園をいったんたたんで、やり直さなければならないと思ったとおっしゃっていました。栗田正治理事さんは、人を見る目が鋭く、見通しが確かで、実践者でもありました。平成十七年に太平観音堂が不審火で全焼し、建て直すときの全責任を果たされ

ました。一緒に近隣のお宅をお詫びに回ったことを忘れません。この方がそのようにおっしゃったのです。それほどの危機でした。

思い返すと、校長になって赴任したどの高校でも、最初は混乱がありました。私がその汚れた土壌つまり雰囲気を感じてしまい、それを許せなくて闘うからでしょうか。混乱が収まると、それぞれの高校は見違えるようになり、素晴らしい教育実績をあげるようになりました。でも、愛育園の混乱はそのどれよりも大きかったのです。

平成二十年三月三十一日に退職辞令をもらいに県庁に行ったとき、愛育園の混乱は始まっていました。私が深志の時に美須々の校長で、共に苦労を分かち合い闘った同い年の田中秀憲校長に「また闘いだ」と話すと、「藤本さんは大丈夫だよ。いつもバトルに勝つでしょう。」と励まされました。

でも、そのバトルはこれまでで最も大きく、最も困難で、収拾するのに十二年もかかったのです。令和二年度（十三年目）が再生（新生）愛育園第一年でした。

信濃教育会から原稿を頼まれたときに、愛育園から始まって愛育園で終わるように構想を立てました。仏さまに導かれて愛育園の園長に就任して、全国に誇れる立派な愛育園になったことを書きたいと思いました。そこには、避けていた愛育園の仕事に就いたいきさつを書かなければなりません。当時の大混乱は、二度と起こさない決意で創立六十五周年記念誌「愛の花園」に書き記しました。それを読み返して十三年前のことを思い出しました。当たり前のことです

が、あの頃は児童養護施設の仕事を全く分かっていませんでした。そして、児童養護施設の仕事には三十五年間の教員生活で培ってきたことは全く役に立ちませんでした。経歴も、人脈も、仕事も、すべては役に立たず、まっさらな状況で、身を守るものは何もないスタートでした。何もわからない状況の中で、内からも外からも攻撃を受けました。子どもたちも荒れていましたし、彼らがどんな子どもたちかもわかっていませんでした。本当によく乗り越えたなあ。そう思います。

あれから十三年経って、十年一昔でいろいろなことも時効だから、当時のことを書いてみようという気持ちになりました。それは、社会的養護（代替養育）がいつでも陥る可能性と危険性を持っていることを示すことです。社会的養護に携わる人の宿命とも思います。誰が悪い彼が悪いではありません。誰もがそうなってしまう可能性を持っているように思います。それを明らかにして解決しない限り、例えば家庭的養育優先と言って、里親や小舎制施設に形態を変えても、社会的養護の問題は解決できないのです。社会的養護に委ねられた子どもたちは幸せになれないのです。私はそう思います。

愛育園がどのようにこの問題を解決して、今のように子どもたちが落ち着いて自分の夢の実現のために毎日を頑張る施設に変わったかも、その中でお話しできるでしょう。でも、それは仏さまが守って下さったともいえるほど、見えない力に助けられた、奇跡とも言えることでした。

次のように構想を立てました。

一．匿名の告発状（内部告発）

二．告発状の分析

①　告発状を受けた人の立場・・・なぜそうしかできなかったのか

②　告発状を出した人の立場・・・なぜ告発状を出さざるを得なかったのか

③　告発状の背景・・・どうして円福寺愛育園で①②のことが起きてしまったのか。

④　告発状に登場する子どもの荒れの背景　荒れる必然　子ども自身のこと、当時の養育

　大舎制と職員体制

⑤　児童福祉施設連盟

三．円福寺愛育園の目指すもの

①　混乱（無力の養育）からの脱却・・・無力の養育とは

②　施設内虐待問題・・・力で子どもを抑えることは出来ない。育てることは出来ない。

③　混乱や児童の問題行動は改善のチャンス・・・これは学校でも同じ

④　いろいろな子どもたち・・・みんなどうしているだろう

⑤　大きな家族　愛の家庭　愛育園の目指すもの

職員の皆さんありがとう。十三年間、苦労を共にして今の愛育園の柱となってくれている石﨑主任保育士ありがとう。そして、勤続十年になりたくさんの苦労を乗り越えて、立派な指導員となった冨澤主任指導員ありがとう。今がんばっている職員ありがとう。そして、辞めていった大勢の職員もありがとう。

大心 圓福

自身が生まれ変わるということ
大本山永平寺安居を終えて

藤本　大心

皆様初めまして、私は円福寺住職藤本光世の次男、藤本大心です。この度、お話を頂きまして「圓福」に私の永平寺安居のお話を書かせて頂くこととなりました。このような機会をいただけましたことに本当に感謝しております。私自身大変未熟者ですので、ここで仏教の深い話や何か皆様の為になるようなことが書ける程の力はまだまだございませんので、私自身の永平寺上山に至るまでと修行中の話とその後の体験談を書かせて頂ければと思います。この事が何か皆様のお役に立てるのならば幸いでございます。

私は曹洞宗大本山永平寺に平成31年3月29日に上山し、令和2年5月2日に下山しました。上山時の年齢は35歳でした。同安居の仲間はほぼ大学卒業後の22歳～25歳の方々でしたので、私は上から数えて四番目に年長者でした。お寺に生まれた者として一般的に考えて遅い安居だと思います。まずはそんな私がこの年になって永平寺に行くという事を考える様になった経緯を二回に分けてお話しできればと思います。

まず私の経歴ですが、幼い頃から手先が器用だったのか物を作る事が好きで、小学校の頃は折り紙やロボット製作など集中して行っていました。父と携帯ラジオをはんだ付けで作ったのがとてもよく覚えています。中学校

は篠ノ井東中学校で、運動が苦手だったために部活動には所属しておらず、成績は平均より少し上な辺りでした。時間があれば寝てばかりいたので、祖母によく「大心君は三年寝太郎だねぇ」と言われていました。こんな私でしたが高校には学校推薦の話を頂いたので受験を避けて長野日本大学高等学校へ入学しました。長野日大での成績はこれもまた普通より少し上な辺りで、大学へは物作りが好きだったことから日本大学理工学部機械工学科へ推薦で入学しました。要領がいいのか無難な成績を維持して受験を避けて大学まで行きました。その後が問題でした。怠け癖が出たのか大学での成績はギリギリの状態で、かろうじて留年は避けましたが、就職のイメージが沸かずに大学院試験を受けて不合格になりまして（さすがに成績が良くなくて推薦はありませんでした）、いざ就職しなければと今度は研究室の教授の先生からの推薦で東京の尾久にある精密プレス加工、精密切削加工を得意とする株式会社大平に入社しました。株式会社大平は筆記具の部品などを製造し、筆記具メーカーに納めていました。一年目は工場で、二年目から営業の話を頂きまして、営業に配属となりました。その営業の部署が「営業一課：海外担当」だったのですが、私は受験から避けてきた（特に英語から）ために、自信が無い中で大変苦労しました。毎年二月にはドイツのフランクフルトにPaper Worldという筆記具の見本市が開かれており、社長と部長、企画担当と私の四人で営業にいっていました。こんな経験をさせて頂いたことは今でも夢のようで本当に感謝しています。海外の担当者と対面するたびになんでこんなに相手は自信に溢れているんだろうと感じたのを覚えています。今振り返ると受験勉強や部

活動などの苦しいことを避けていたため、乗り越えた時に得られる自分を信じられるような自信は無かったのでしょう。六年間勤務した後に今の勤め先の円福幼稚園に転職をしました。五年目のときに両親から大宮で一緒に食事をしている最中に「幼稚園が認定こども園になるから帰ってきて手伝ってほしい」と話をされまして、一年後に転職しました。ずっと頭のどこかに家業の事がありましたので、両親や将来を考えて決断しました。株式会社大平の皆様には大変お世話になりました。上司の当時の部長には育てて頂いて本当に感謝しています。その後、畑違いの幼稚園の職場でいきなり副園長という立場を与えて頂いた訳ですが、保育のことは何ができるわけではなく、パソコンが得意でしたので事務関係の業務を教えてもらいながら経験を積んでいきました。そして六年目の平成29年に園長という大役に就かせて頂きまして、平成30年12月に永平寺に行こうと思うに至りました。その決意をしたときは相当悩んでいました。今振り返ってみてもそれまでの自分の生き方では髪の毛を剃ってお坊さんになる決意をするとはとても信じられません。両親もあまり僧侶になりなさいと強くは言いませんでしたので、ずっと避けてきた道です。私の運命がそうなっていたでしょうか・・・。その時のお話は今回では書き切れませんので、また次の機会に書かせて頂ければと思います。ありがとうございました。

感謝のお知らせ

○令和三年三月分
（二月二十五日～三月二十六日）

●SABA資金
（千葉県）様
（埼玉県）様
（長野県）様
（静岡県）様
（埼玉県）様
（長野県）様

●エコ村支援
（長野県）様
（長野県）様
（長野県）様
（長野県）様
（長野県）様
（長野県）様
（長野県）様
（長野県）様

●タイスラム奨学生支援
（長野県）様

●太平観音堂護持会費
（長野県）様

ご協力ありがとうございました。

四月の法母会
二十五日(日)
午前八時半より

五月の参禅会
五日(日)
午前五時より
（開始時刻が早くなります）

『円福』 令和3年4月号
第四八七号
定価 一五〇円

発行日 令和3年4月10日
発行人 藤本光世
発行所 円福友の会
〒388-8005 長野市篠ノ井横田円福寺
TEL(〇二六)二九二-〇三八一
FAX(〇二六)二九三-九六二九
振替口座
〇〇五二〇-七-一六二五六

円福友の会・ＳＡＢＡスクール

愛の日の丸　ＳＡＢＡ運動

カンボジア小学校校舎建設

カンボジア　エコ村支援

タイ スラム街奨学生支援（教育里親）

大災害被災地支援

シャンティ国際ボランティア会協力

おもいやりの会（愛育園児童自立支援）

太平観音堂護持発展

円福友の会入会のすすめ

上記の **協力金は**　郵便振替 **00520－7－16256**
加入者　**円福友の会**　あてに御送金下さい

〒388-8005　長野市篠ノ井横田 円福寺内
TEL　０２６－２９２－０３８１
FAX　０２６－２９３－９６２９
http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/
enpuku2@janis.or.jp